



佐藤勲副学長

インタビュー第3弾

『私は進路を

こうして決めた』

「私は進路をこうして決めた」第3弾として、東工大副学長佐藤勲先生にインタビューを行いました。先生が学生時代にどのように考えて進路選択（系所属・研究室配属など）や研究テーマ決定をしたのかを詳しくお聞きいたしました。（2020/10/30 インタビュー実施。）

佐藤勲先生 プロフィール

東京工業大学理事・副学長を務める。1981年3月に東工大機械工学科を卒業し、同大学院理工学研究科生産機械工学専攻修士、博士課程へ進む。その後東工大工学部助手、助教授を経て、2016年工学院教授に就任し2年間務める。2018年より現職。専門分野は伝熱工学、成形加工学、計測工学。

現在または過去に行った研究内容を教えてください。特に学部生の頃の研究の話や自分が好きだった研究、代表的な研究、反響が大きかった研究、一番引用された研究などを教えてください。

学生時代の研究

佐藤勲先生：学部の時代は機械力学を専門にしている、特にターボチャージャーの振動の研究をしていた。ディーゼルエンジン用のターボチャージャーに圧縮空気を入れて、タービンを回し、その振動を測るという研究を学部時代に行っていた。ガスタービンが大好きだったので、本当はガスタービン関連の研究をしてみたかった。しかし残念ながら、東工大で直接的にガスタービンを対象としている研究室はなかったので、ターボチャージャーのように羽をうまく回すことにも興味があったということもあり、その研究室に行った。大学院修士に進学後、学科を変え、熱工学の研究室に行った。そこでは、核融合炉のトカマクという装置について研究した。核融合反応がおきると物凄い熱が発生するので、装置の壁を冷やさないと炉が解ける。それを避けるため、空気を流して外側から冷やすのだが、内側の壁しか温まらない。片側しか温まらない壁の

熱を上手く除去するにはどうすればよいかという研究を大学院の修士・博士までずっとやっていた。

最後の研究

その後もいろいろな研究に取り組み、いろいろな変遷があったが、最後のころにずっとメインのテーマになっていたのは、「ものをつくるときに熱をどうすればうまく使えるか」というエネルギー利用の分野だ。エネルギーについて考えるとき、どうしても省エネルギーという方向に考えがちだと思う。でも、どんどん使うエネルギーを減らしてしまっただけではあんまりおもしろくないよね。今まで通りエネルギーは使うが、使うエネルギーの効果を高くすることを考えたほうが幸せだよね。そのような観点でずっと研究をしていた。身近な例で言うと、プラスチックは1度溶かして、金型の中に入れて、それから固めて作る。しかし、うまく温めてうまく冷やさないで、よいモノは出来ない。だから、どのように加熱・冷却すれば、どのようなモノができるかという関係をずっと研究していた。熱工学という学問を学べば、最適な加熱・冷却方法を予測できるので、予測した結果をメーカーさんに提供すると結構喜んでいただけました。論文の引用とは少し違うかもしれないが、何度も使われたという意味では、この分野の研究成果

が1番大きかったね。やはり「人々を幸せにするために工学は何が出来るのか」をどうしても考えてしまうので、エネルギーの観点から「貧乏くさくならないように、幸せになるよう」という考え方でずっと研究をしていた。私の研究は、自分の興味・関心からタービンに始まり、そのあと核融合炉の研究をして、そこから発展してエネルギーの研究に変遷していったというところだね。

学修コンシェルジュ Jr.広報班(以下、広)：学部時代の「ガスタービンの研究」から、大学院時代の「核融合炉の壁をどう冷やすかの研究」へなぜ変遷されたのですか？

佐藤：裏話みたいになるけど、実は学部時代の研究室の先生と大学院修士のときの先生が、学科は違ったが友達どうしだった。大学院のときの先生が学部時代の先生に助手として私が欲しいと言ったらしい。そういう変な経緯があり、熱工学も興味の対象にあったので、研究室を変えた。

広：タービンの研究をされていたと思いますが、いつ頃始めようと思われたのですか。

佐藤：車が好きだったことから転じて、高校生後半か、大学入学直後ごろにガスタービンに興味湧いてきた。車の世界で「次世代のエンジンはガスタービンだ」と言われていた時期があった。ガスタービンって要は羽根車だよな。「風車みたいなので車が走るのかい」と疑問に思い、走行や効率の面で改善できる点がまだ多くあると思った。それが興味の対象となったきっかけだった気がする。発電所のタービン等は大きすぎて、自分の興味の対象からはちょっと外れていた。やっぱりもう少しハンディーというか、自分で手を下せるようなタービンに興味があった。

広：研究テーマはどのように決めた方が良いでしょうか。

佐藤：理工系の場合は、社会の関心ごとを解決する社会駆動型の研究テーマの決め方と、自分の興味、自分が不思議に思っていることを解決するという決め方の2通りがある。理学の人たちは自分の興味を満たす、自分が分からないことを解決するというテーマの決めた方が多いし、もしかしたら人文社会学、いわゆる人文学に近い分野の人もその決め方が多いかもしれない。

社会の関心事、困り事を解決するというのは工学に近い。工学は社会学の人たちと同じセンスを持っていて、社会の困り事に対してどう解決する

のかを考える。工学系って実は恵まれていて、研究テーマの選び方が2通りあってどちらもとれるんだよ。だからテーマを決めるときは、どちらを基にするか考えながら決めれば良いので、決め方は広いと思う。純粋文学とか純粋理学系はどっちかという社会の困りごととは離れたところにいるので、自分の興味で選ぶしかないから、それはそれで決めるのが大変かもしれない。まあでも自分の関心のあるところで決めれば良いと思う。社会学のような社会しか対象にしていない学問だと、「社会の困りごとは何ですか」とか、「社会の望みは何だ」と聞かないといけないから、事前に調べることがすごく増えるので、そこは大変かもしれない。

工学分野に関しては、自分の興味と社会の関心の、どちらかをもとに研究テーマを決めるのが良いと思う。ただし、中途半端なテーマはやめたほうが良い。中途半端なことをやると社会から「何それ？」と言われるし、自分としても納得できなかつたりする。中途半端はやめてどっちかに寄せたほうが良い。

なぜ東工大に進学されたのかを教えてください。

東工大進学

佐藤：高校生のとき、東大に行くか、東工大に行くかずっと悩んでいた。しかし、あるきっかけで東工大に行くこと決めた。それは受験勉強のために東大の1次試験の過去問を解いているときだった。私たちが大学受験した時代は共通1次が始まる前だったので、基本的には1次試験は大学が独自に作っていた。東大の1次試験はマークシートだった。数学の過去問を解いていると、ある問題で答えが「-3」になった。「-3」という選択肢を探すとあった。だけど、問題文の穴埋めをするところをよく見ると、穴の前に「-」が付いていた。だから「-3」を入れると不正解になるんだよ。選択肢の中から「3」を選ばないと正解にならない。この問題がすごく気に入らなくて、「こんな問題を出す大学に行くもんか」と思って、東大の受験を止めた。もともと工学系、特に機械系にすごく興味があったので、東大工学部か東工大4類か悩んでいたが、東大が入試問題にそんな問題を出すなら行くまいと思い、東工大へ来た。

また高校生のときは必ずしも理系や機械系だけを進学先として考えていたわけではなく、フランス文学の学科へ進学しようと思っていた時期も

あった。高校の時代は、時間があるとボードレーヌやヴェルレーヌのようなフランスの詩人の詩を読んだりしていた。高校の授業で教わった漢文の五言絶句や七言律詩のような定型的な詩から何となく詩のイメージを持っていたんだけど、ヴェルレーヌのように散文みたいな普通の文章を詩にすることにすごく疑問があった。そこでフランス文学でもそのことに取り組もうと思っていたんだよ。

電子工学への興味

フランス人の詩や漢詩、そして機械に興味があったが、同時に電子工学にも興味があった。高校の図書館にあった電子系の雑誌、「電波科学」を何度も借りて、回路図を写したりした。司書のお姉さんに「最初から最後までバックナンバーを借り切ったのはあなたが初めてです」と言われるぐらい興味があった。いわゆる文系の分野と理工系の分野、機械も含めてどちらも関心はあったね。ただ仕事にするなら人の役に直接立った方が良いと思い工学系を選んで、そして、受験時のいきさつがあって東工大に来たというそういう道筋です。

大学1年目のときはどのように過ごされましたか。サークル・部活動、自主的な学習が系所属に与えた影響や、部活が研究に活かされた経験などはあるでしょうか。

仲間と話し合う

佐藤：サークル活動はしていなかったけれども、1年生のときは類や語学の授業、化学の実験でのグループで友達は多かったね。その友達とよく授業をさぼって遊びに行っていた。そのような仲間と将来のことを考えて、研究室選択ほど具体的ではないが、「このような方向に行けたら良いな」と思っていた。

1年生のときに自分の中でショックを受けた出来事がある。みなさんからするともう過去の話かもしれないが、我々が学生のころはコンピューターというものはほとんどなかった。でも、大学に来ると大型計算機があった。我々のころは Fortran という言語を使っていて、そのコーディングを初めて教わったときに「アルゴリズムを考えるとはいかようなことか」とそれはすごくショッキングだった。そのときにはじめて、モノを組み立てることが興味の対象になると気付いた。その大型計算機を使って仲間とワイ

ワイやりながらプログラミングをした。当時は不真面目な学生だったから、先生が出す問題は解かなくて、自分で円周率の計算方法を考えて、大型計算機でそれを試したりした。3.2 ぐらいまでは導けたからね。そういうことを仲間とワイワイやるのはすごく楽しかったね。それと自分の個人的な興味が繋がって、学部の研究室とか修士の研究室とかを選択するときに繋がった。やはり仲間と話をすることはすごく大事だと思うよ。それと、自分の興味をすごく大事にしといたほうが良いと思う。

広：先生は1年生のころから、将来のことを考えられていたようですが、専門分野はなるべく早く決めるべきですか？

佐藤：時期は特に考えなくて良いと思うけれども、あまりギリギリで決めると迷ってしまうから避けるべきだと思う。4年生で研究室に入る人は、3年生の初めぐらいに考え始めれば良い。そんなに早く決める必要はないよ。本当に興味があるものは忘れられないはずだから、早くやろうが、あとでやろうが、背骨に相当するところはあまり変わらないと思う。それに付随する知識を周りの仲間と話しながら、進路先に納得する期間が1年ぐらいあった方が良いとは思っている。あまり流されて決めない方が良いよ。やりたいことは自分の背骨に沿って選んだ方が良いと思うよ。

広：学部時代にサークルをしておらず、アルゴリズム等に関心があったということでしたが、学部時代は遊びよりも勉強を中心的にやっていたということですか。

佐藤：勉強はしていなかったね（笑）。インタビュアーさんは機械系だから製図の講義はまだあるよね。今は CAD を使っていると思うけど、我々の頃はドラフターの上で描いていた。製図室という部屋があって、そこに製図版が並んでいた。製図の授業が始まるとすぐに出席が取られた。出席を取ると、私は製図室からさっさといなくなって、仲間と一緒に喫茶店に行って、気長にしゃべっていた。夕方の課題提出の時間になったら、事前に用意してきたものを出していた。これは変な言い方だけど、製図室のドラフターって汚いんだよね(笑)。ドラフターで定規を動かすと紙が汚れるのが嫌で、自分でドラフターを買って家で描いていた。課題提出はちゃんとしていたけど、大学の製図室では多分一回も図面を描いたことがなかったんじゃないかな。その間友達とずっとしゃべっていた。そういう不真面目な学生だった。

広：講義等を受けて、「これについてもっと知りたい」ということはなか

ったのでしょうか。

佐藤：あんまりないね。演習の授業があって、それは当然課題を提出しなきゃいけないから、ちゃんと受けていた。だけど、座学の授業はあんまり真面目に受けていなかったね。先生には申し訳ないけど。あんまり言っちゃいけないね。この立場になると(笑)。

広：もともとご自身が持っていた関心やご友人との会話を大事にされていたのですね。

佐藤：本当に自分が興味のあるものって、変な言い方だけど、先生の話聞いてももちろん良いけれど、教科書を読み込むとある程度分かる。どうしてもわからなかったら、そこの部分は授業で聴くけれど、それでもちゃんと勉強はできる。能動的に学ぶつもりであれば、必ずしも授業だけじゃなくても学べる。大学の授業は平均的な生徒の学力に合わせて授業をするので、進める人は自分で勝手に進めるわけですよ。それが厳しい人も当然いるけれど。その中で授業をうまく使えば良くて、自分でわからないところは説明を聞けば良いし、自分でわかるのであれば授業に毎回出席する必要はない。ただ課題を出さないと当然単位はくれないから、それはやらな

きやいけないけど。もし授業に出ないのであれば、その時間をいかに有効に利用するかを常に考えた方が良くと思う。私の場合は仲間とだべっていた。そのときはきっとだべることの優先順位の方が高かったのだろうね。

仲間とだべる

広：仲間と「だべっている」ときに進路の話をされましたか。

佐藤：進路という程、シリアスな話はしなかったけれど、それぞれ社会でどうやって暮らしていくか、生きていくのかという話になることはあった。将来について話し合えたことは、自分の進路決定には直接影響はしないけど、刺激になった。

広：今の1年生は対面で将来について話し合うことが出来ないということで、このインタビューをさせていただいています。先生はこの状況をどのようにお考えですか？

佐藤：そうだよね。だから、こういうコロナ禍の状況で、そのような大学の1番大事なところが止められてしまっている。授業というのはさっきも

言ったけれど、出席しようがしまいがどちらでも良いと思う。やっぱり仲間とだべる機会が減っているというのは、大学としては申し訳ないと思う。今でも感染者、陽性者、濃厚接触の疑いって情報が集まってくるようになってきているけれど、それを見ていると、こうやってマスクして、ある程度距離を取ってだべる分にはうつる可能性が低いと思う。また、夜の部で飲み会に行くということもだべる上ですごく重要なことだけど、飲み会に行くとうつるみたいね。だから昼間の時間にマスクをしながら距離をとって、だべっている機会くらいは作ってあげたいと思う。本当に他の人と話をするというのは、刺激を受けるからすごく良いよ。それが大学のとは言わないけど、キャンパスの役割だと思う。そのキャンパスの役割をそろそろ果たせるようなやり方も大学はした方が良くないかな。ただこれから冬になるから、インフルエンザと一緒にになるとまた難しくなるかもしれない。

大学在学中の失敗経験などがあれば教えてくださいませんか。

失敗経験

佐藤：失敗はいっぱいあるね。個人的には失敗はいっぱいしても良いと思うし、学生の間は失敗をしても許される期間だから、そこはあまり個人的

にも気にしていない。でもやはり人対人の関係で失敗すると落ち込むよ。やっぱり他の人を傷つけたり、言わなければ良かったと思ったりすることはいっぱいあります。変な言い方だけど、後悔先に立たないので、1回失敗したらそれを繰り返さない、繰り返さないだけでなく、次に役立てることが凄く大事。自分でもいっぱい失敗はしてきたし、皆さんもいっぱい失敗すると思うけど、次に役立てれば良いと思います。

ニオイを感じる

広：失敗とはちょっと違いますが、学部時代にやっておけば良かったと後悔していることはありますか？

佐藤：サークルに入らなかったことに関して後悔はあるね。タービンとか機械に興味があったから、自動車部に興味はあった。でも趣味の分野でサークルに入ると、自分の進めたい形と違う形になるのが怖くて、入らなかった。でも入っておけば良かったかもしれない。

広：事前に佐藤先生のインタビュー記事を読ませていただいたのですが、そこで佐藤先生は海外留学の経験が学部時代はなかったとおっしゃって

いました。この点はいかがでしょうか。

佐藤：我々の時代は学部生の頃に海外に出ることはほとんどなく、大学院生になってから、国際会議に行く程度だった。そこは残念だったかなとは思いますが、私の上司で、国際会議が大好きな先生がよく海外へ連れて行ってくれた。多いときは年に4回ぐらい国際会議に出席するため、いろんな国へ行った。その先生は食べるのが好きな人で、嗅覚が鋭かった。だから食事の美味しいお店を見つけるのが上手かった。一緒に何度も行ったおかげで、そういう店を探す術は僕もしっかり身につけたつもりだね。海外に出て一番大事なことは、言葉の問題ではなく、どういう人たちがいて、どんな食事があって、その人たちがどんな暮らしをしているのかを知ることの方がむしろ大事。国際会議に出て発表することはもちろん大事だが、それ以上にやっぱりニオイを感じる、雰囲気を知るということは海外に出て大事だと思った。留学の経験は無いけれども、何度も海外でそのような経験をした。そのような意味ではある程度、留学経験の無さを補えていると思う。ただ留学っていう機会は残念ながら無かったですね。

広：東工大には超短期プログラムなど多岐にわたる留学プログラムが提供されていますが、そういうものが充実している間は行くべきですか？

佐藤：そうだと思う。長期留学だと大学での学修に影響するから、それは考えて行った方が良く。でも超短期系は経験やニオイを感じてくるという意味では良いことなので、出来るだけ行くべきだとは思いますがね。いろんな国へ行って公共交通機関に乗ると、「ここは大丈夫」、「ここはまずいかも」みたいなことが何となくわかるようになってくる。そういう自分の身を守るという意味も含めて、ニオイを感じる、雰囲気を知覚するには場数を踏まないといけない。だから出来るだけ行った方が良くと思う。もちろん危ないところに行けという意味じゃないよ。

広：なぜニオイを感じる事が大事なのですか？

佐藤：ニオイを感じると、街のたたずまいを理解できる。街のたたずまいを理解すると、そこに住む人の暮らしぶりも理解できる。もし海外の人たちと将来仕事をしようとしたとき、その人たちの暮らしを知ることが凄く大事なんだよ。だから、ニオイを感じる事が重要。そういう意味でこれから皆さんが社会にでると国境なんて関係ないので、いろいろな国の人たちと仕事したり、仲間になったり、もしかしたら競争したりするかもしれない。そのときに相手を知っているというのは非常に大事。いろいろな国

の人たちがいるから、出来るだけ多くの人たちを知っていることが大事だと思うよ。

当時、どのように学科や研究室を決めましたか。なぜ電子物理工学科に進まれたのでしょうか。

研究室の選び方

佐藤：研究室はやはり最初は興味の対象で決めた。ただ周りの友達との話し合いも影響している。けれども、最終的には自分の興味や先生のキャラクターで選んだ。研究室について少しはわかると思うけど、共同生活体なので、肌に合わないところはやめた方が良い。ある程度長く一緒に過ごす必要があるので、興味のある対象だったとしても、どうしても無理というところはやめた方が良いと思う。やっぱり生活の場として肌が合って、その上で自分の興味に近いところを選ぶことが大事だと思う。私はそうやって選んだね。

広：学長もそのようにおっしゃっていました。

佐藤：多分そうだと思う。みんなそうじゃないかな。今になって思えばということだと思うけど。動物的勘じゃないけど、辞めたいと思ってしまいそうな研究室は選ばないこと。これは良い悪いではなくて、肌に合う合わないだと思う。人によって好きな雰囲気が違うので、無理して居心地の悪いところを選ぶ必要はないと思う。

研究室のスタイル

広：研究室のスタイルには放任主義や手厚く見てくれるなどいろいろあると思いますが、佐藤先生の研究室はどのようなスタイルだったのでしょうか。

佐藤：私の場合は基本的には完全放任だったね。2か月後とかに締め切りを設けて、それまでに研究の報告をするというのはあったけれど、その間の時間管理はそれぞれの学生さんに任せた。そこで結果が出ていないと「何をやってたの？」ってなったけど(笑)。そういうタイムマネジメントを自分でするとするのは社会に出た後で非常に重要だと思う。大学だと提出までの期間が長くて、1か月か2か月ぐらいあるけれど、会社に行くと「3日後にこれだして」と言われるわけよ。出さないと当然評価が下が

るわけで、3日間でどうやってその業務を遂行するかは自分で考えなくては
いけない。だからその訓練は学生のうちにやっておいた方が良いと思う。
頻繁に指示が来ると、指示を聞いていれはすむようになる。それはあまり
良くて、「今日はくたびれたから休み」とか「遊びに行くから今日や
っちゃおう」ということを自分で考えてタイムマネジメントすることが大
事だと思う。だから比較的長めのタームを設定して、あとは任せるとい
ふふうになっていた。時々それでドツボにはまり、遊び過ぎて結果が出ない
人もいるけどね。まあ、それはそれでさっきの途中の質問にもあったけど、
学生時代の失敗はいくらやってもいいので、次は直せばいい。そういう意
味で放任だった。研究室の先生のキャラクターによるね。

広：そういうところもしっかり見たほうがいいですね。

佐藤：指示待ちになりたい人はいないと思うけど、比較的頻繁に指示を出
してくれた方が安心できる人もいるかもしれないし、逐一指示を出されると
鬱陶しいと感じる人もいるかもしれない。それはもうキャラクターによ
るから馬が合うところで選んだ方が良くと思う。

なぜ企業に就職せず、大学教員になろうと思われたのですか。

大学の教員になった理由

佐藤：これも捻くれた言い方で申し訳ないけど、私は学部4年生のときに実は、大学院に行かないで就職をしようと思っていた。その時は、先程のタービンの話の続きだけど、ガスタービンの開発をやっていた会社の1つとして、石川島播磨重工業株式会社（現在のIHI）があった。そこに行くか結構悩んでいた時期もあった。ただ残念ながら当時、オイルショックで日本の景気がものすごく悪くなったので、石川島播磨はその年、求人を出さなかった。それで仕方なくというわけではないが、東工大の教授から研究室に誘われていたこともあって、「じゃあ修士まで行きますかね」と思って修士課程に進んだ。

修士に行ったので将来の方向性は変わって、その後、「助手にならないか」と言われた。最初は助手になるつもりはあまりなかった。私としては、捻くれた言い方だけど、修士に行ったときからずっと先生と呼ばれる職業には就くまいと思っていた。特に医者と教師と政治家にはなりたくないと思っていた。医者は血を見るのが好きじゃないし、政治家は何をやっているのかよくわからないし、教師はねえ…教えるような立場じゃないなと思

いながら、その3つには就くまいと思っていた。けれど頼まれたから、しょうがないと思ってとりあえずそこに足を踏み込んだ。ただやっぱりやってみて、学生とちゃんとお話しをすると、面白いよ。違ったアイデアを持ってきてくれるから。自分とは違うアイデアがでてくるというのが面白いし、それをちょっとつつくとまた別のアイデアが出てくる。そのような学生さんと出会ったことが、大学に残ったきっかけだね。

広：そもそも、なぜ大学院に行かずに就職しようと思ったのですか。

佐藤：やっぱり一番根っこに戻るけど、人の役に立つため。早く、人の役に立つ仕事がしたいと思っていた気がする。また大学院というものの位置づけがよく分かっていなかったというのもあった。

先生が感じた東工大ならではの魅力を教えてください。

東工大の良さ

佐藤：学生さんが真面目だというのがまず1つの魅力だと思う。真面目でかつ、それぞれが色々とものを考えているから、議論をしたらちゃんと深い議論ができることがこの大学の良いところだね。まあ欲を言えばその深い議論ができる範囲がもう少し広がると良いのだけれども。皆さん良い意味でオタクなので(笑)。ただ、深いところに突っ込んでいくと、ちゃんとした議論ができるのがこの大学の特色だと思う。やっぱり自分のやりたいこと、興味のあることを学生の皆さんが明確に持っている。社会に出るとそれなりにきちんと活躍できるし、それはこの大学の魅力だろうね。あとは、地理的に言うと3キャンパスとも駅から近いこと(笑)。他の大学のキャンパスって行ったことある？大体駅から結構遠いよね。歩いて行けるところは少なく、バスに乗る必要があったりする。ここぐらいだよ、駅から歩いてすぐ正門くぐれるの。国内の学会等でいろんな大学に行くが、遠いと思うね。

これから系所属・研究室配属する学生に伝えたいことはありますか。

関心を持ち続ける

佐藤：これも繰り返しになってしまうけど、自分の興味、関心を常に持ち続けることが大事だね。そして、それに合った系や研究室を探す。あとは実際に行って雰囲気を感じて、肌に合うかどうかをちゃんと判断して選ぶことが大切だと思う。それと、将来就職が有利かという考えで選ぶことはやめた方が良く。将来何をしたいかを常に思っているのは大事だけど、有利不利で考えると興味がそれちゃうから。大学にいる期間が幸せではなくるので、自分の興味関心に近いところを選んで、やりたいことができるところに入るのが1番良いと思う。

広：私は最初に興味があったことから、だんだん他のことに興味に移ることもあるのですが、そのようなことはなかったのですか？

佐藤：あったよ。いろいろなことに興味があっても良いと思うよ。例えば2つの分野に興味があっても、一方を捨てる必要はなく、逆に増やしていけば良い。そして、いっぱい手足が出てきたところで研究室を見て、どれ

が肌に合うかで選ぶくらいで良いと思う。どれか1つに興味関心を絞る必要はない。また、できれば理工系だけではなく、いわゆる文系についても興味を持っておいた方が良く、そういう興味関心で友達ができることがすごく大事なので、できるだけたくさん興味関心を持ち続けるべきだよ。もちろん今どれかに熱中すると、もう片方に対して意識が薄れるのは事実だと思うけどね。でも別に捨てる必要はない。また興味が出たら戻れば良い。それができるのが自分の興味です。今はある分野に集中して、飽きたら違う分野に関心に移すということもできるので、いっぱい触手を伸ばしてください。それが大事だと思います。

インタビュアー（学修コンシェルジュ Jr.）の紹介

住友啓允(学士課程 3年 工学院機械系)

濱岡遼真(学士課程 3年 工学院機械系)

昨年度までは修学支援部門 LINE 公式アカウントで記事の配信を行っていましたが、今年度からはインタビュー記事「私は進路をこうして決めた」に取り組んでいます。

編集後記

今まで3人の先生方にインタビューを行いました。全員がその当時社会で流行したものに少なからず影響されて進路を決めていたことが非常に興味深かったです。また研究室を選ぶ際には、他の人と馬が合うかどうかを見ることが、研究内容と同等の重要性があると改めて感じました。

アンケートのお願い

今回のインタビュー記事に関する感想や改善点等お寄せください。1分程度で回答可能です。頂いたアンケートをもとに、次回以降のインタビューに生かしていきたいと考えております。尚、このアンケートで得た情報が外部に出ることは一切ございません。[ご回答はこちらから。](#)